

一喜一憂

No. 9

「一喜一憂」

情況の変化に喜んだり、心配したりすること

藤屋 侃士

(下松市幸ヶ丘)

パレスチナのオリーブ

5月中旬。パレスチナの状況は急激に悪化し、21日にイスラエルとガザのハマスの間で停戦が合意され、少なくとも民間人への被害がなくなることに胸をなでおろした。

パレスチナで平和を象徴するもの、それはオリーブである。

前回の「一喜一憂」で紹介した、ホーリー・チャイルド・プログラム

のスタッフなど、私たちが知っているパレスチナの人々は、新型コロナウイルス感染症がまん延するなかでもがんばって活動を続ける心優しい人々だ。

クリスマスメッセージの中にあった、「私たちは、あなたと共に成長しなかったの

かと思つていたが、そうではないらしい。オリーブは自家受粉ができず、2本以上の木がなると実がならないと聞



荒れ地に積まれた石

パレスチナでも特に南部は降水量が少なく、荒涼とした丘陵地帯が広がる。そのような中でも、人々は昔からオリーブを植えてきた。乾燥地帯の夏は、朝晩と昼間の温度差が激しい。石は空気に比べて早く冷たくなるので石には夜露がつく。パレスチナではこれを利用してきた。オリーブ



春のオリーブ畑

そうである。そして樹齢何百年という立派なオリーブの樹に成長していく。

オリーブが平和の象徴とされるのは旧約聖書の「ノアの方舟」にある、洪水を生き延びた後、ノアがハトを放つたところ、ハトはオリーブの枝をくわえて戻ってきて、地上にオリーブが育つ平和が戻ったことがわかったという一節からである。

それと共に、厳しい状況下でも、自然の力と人の知恵を活かして、大地に根付くオリーブは、私たちに平和への希望を抱かせてくれると感ずる。

◇

(本人は入院中で執筆が難しいのですが、関わるエピソードなどを、家族で書きつないでおきたいと思います。)

地中海沿岸地域が原産で、乾燥した気候を好むといわれるオリーブだが、全くの荒地地に植えて根付くものではないらしい。

パレスチナでも特に南部は降水量が少なく、荒涼とした丘陵地帯が広がる。そのような中でも、人々は昔からオリーブを植えてきた。



たわわに実るオリーブ